

令和 7 年 6 月 24 日現在

機関番号：32692

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2024

課題番号：20K02307

研究課題名（和文）がん患者の外見と生活の質の向上を目的としたアピアランス自己評価表の開発

研究課題名（英文）Development of an Appearance Self-Assessment Table to Improve the Appearance and Quality of Life of Cancer Patients

研究代表者

石橋 仁美（ISHIBAH, HITOMI）

東京工科大学・医療保健学部・准教授

研究者番号：30583900

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、がん患者の外見に関する悩みを生活の質の観点から包括的に捉える「ルックスケア自己評価表」を開発し、内容的および構成概念的妥当性の検証を行った。内容的妥当性については、論文「がん患者に対する生活と関連づけたルックスケア自己評価表の開発：Nominal Group Techniqueを用いた内容的妥当性の検討」が採択され、現在掲載待ちである。構成概念妥当性は、学会発表「がん患者に対するルックスケア評価表の開発：構成概念妥当性の検討」を含む複数の学会にて報告した。今後、医療・看護・作業療法分野における外見支援の実践的活用と、多職種連携による介入の基盤整備が期待される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、がん治療により外見の変化を経験した患者が、自身の生活の中でどのような困難を抱えているのかを把握するための「ルックスケア自己評価表」を開発した。この評価表は、単に見た目の変化を問うのではなく、「外見を気にせず人に会えるか」「仕事や趣味に参加できているか」といった日常生活への影響に焦点を当てている点に特徴がある。全国500名への調査により、評価表の内容が的確であり、信頼性が高いことが明らかとなった。本研究の成果は、患者自身の気づきを促し、医療職や支援者が適切な支援を行うきっかけとなる。今後、リハビリを中心に医療現場での活用を通じ、がん患者の生活の質向上に貢献することが期待される。

研究成果の概要（英文）：In this study, we developed a “Looks Care Self-Assessment Chart” that comprehensively captures concerns about the appearance of cancer patients from the perspective of quality of life, and examined its content and construct validity. For content validity, the paper, “A Self-Assessment Chart for Cancer Patients for Looks Care in Relation to Their Lives: An Examination of Content Validity,” was accepted for publication and is currently awaiting publication. The construct validity was reported at several academic conferences, including the conference presentation “Development of the Look-Care Assessment Chart for Cancer Patients: An Examination of Construct Validity. In the future, practical use of appearance support in the medical, nursing, and occupational therapy fields and the development of a foundation for intervention through multidisciplinary collaboration are expected.

研究分野：社会福祉学関連

キーワード：がん ルックスケア アピアランスケア 評価表 生活行為 作業療法

1. 研究開始当初の背景

日本におけるがん罹患率は年々増加しており、2017年には生涯で2人に1人ががんを発症するという統計が示されている¹⁾。医療技術の進歩により、がんの5年生存率も上昇しており¹⁾、治療を継続しながら社会生活を送る患者が増加している。実際、通院しながら働くがん患者は全国に32.5万人いると報告されている²⁾。こうした背景から、がんの罹患後も「生活の質(QOL)」を保ちながら生きることへの支援が重視されている。

がん治療に伴う副作用のうち、外見の変化はとくに苦痛が大きいとされ、がん患者638名を対象とした調査では、治療の副作用の中でも外見に現れる副作用の苦痛度が高く、97.4%の患者が「外見に関する情報提供は医療機関で行われるべき」と答えている³⁾。そのため、国立がん研究センターでは外見支援を「アピアランスケア」として体系化し、社会参加と結びつけた支援を行っている⁴⁾。

一方、作業療法分野では身体障害領域における支援の中で悪性新生物への対応は約3割とされるが⁵⁾、その多くは身体機能訓練であり、外見への支援が含まれている項目である精神・心理面へのケア、その他のケアは約16%にとどまっている⁶⁾。さらに、外見に注目することへの社会的な懸念、すなわち「ルッキズム(外見にもとづく偏見や差別)」が医療者の支援実践を妨げる要因となっているとの指摘もある⁷⁾⁸⁾⁹⁾。

このような状況において、がん患者本人が外見の変化を生活の中でどのように感じ、どのような支援を必要としているのかを把握しやすくする評価ツールの開発が求められていた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、がん患者の外見変化と日常生活の関係性に焦点を当てた「ルックスケア自己評価表」を開発し、その信頼性および妥当性を検証することである。特に、本評価表は、外見の変化そのものではなく、その変化が日常生活や社会参加にどのような影響を与えているかを評価する点に独自性がある。

たとえば、「外見を気にせず友人と出かけられるか」「仕事や学校に通えているか」「趣味を楽しめているか」といった、日常行動に関する質問項目を通じて、患者自身の気づきや支援ニーズを明確にする構成となっている。また、回答後に医療職との面接を行うことで、外見の悩みをより深く理解し、適切な支援へとつなげることができる枠組みも構想している。

これまで、がん患者の外見と生活の関係を評価する尺度は国内外にほとんど存在せず、本評価表は、患者本人の声を起点とした実践的な支援モデルを構築するための基盤となるものである。ルッキズムの回避と患者中心の支援の両立を図る本研究は、臨床と社会の双方に意義を有すると考えられる。

3. 研究の方法

(1) ルックスケア自己評価表の内容的妥当性の検討

本研究は、尺度開発の国際基準である COSMIN(Consensus-based Standards for the selection of health Measurement Instruments) に準拠して実施した。まず、アピアランスケアに関する国内の事例報告を文献レビューし、外見変化と生活への影響に関する構成概念を整理した。その上で、「治療マネジメント」「整容スキル」「新しい生活様式への適応」の3つの構成概念に基づく28項目の初期質問項目を作成した。内容的妥当性の検討には、がん患者支援の経験を有する医療職(作業療法士、理学療法士、看護師)8名を対象に、Nominal Group Technique (NGT) を用いた3段階の評価・修正プロセスを行い、評価表試作版を完成させた。

(2) ルックスケア自己評価表の構成概念妥当性(構造的妥当性)の検討

上記の試作版評価表に基づき、全国のがん患者を対象に Web アンケート調査を実施した。対象は、がんの診断を受け、治療中、経過観察中、あるいは寛解状態にある18歳以上の成人とした。調査では、ルックスケア自己評価表の全21項目に回答を求め、その構造的妥当性を確認的因子分析によって検討した。調査は外部調査会社に依頼し、統計的解析にはカテゴリカルデータに適した分析手法を用いた。

(3) がん領域における作業療法士のルックスケア実践に関する全国調査

がん患者の作業療法におけるルックスケア実践の現状と課題を明らかにするため、全国のがん診療連携拠点病院に勤務する作業療法士を対象に Web アンケート調査を実施した。対象は日本作業療法士協会に所属する394施設の作業療法士とし、電子メールにて調査協力を依頼した。調査票は、作業療法士の基本情報、ルックスケアの経験有無、作業療法におけるルックスケアの必要性および専門性に関する設問から構成された。分析には KH Coder を用い、単純集計のほか、対応分析および共起ネットワーク分析を行った。

4. 研究成果

(1) ルックスケア自己評価表の内容的妥当性の検討

構成概念の整理と質問項目の作成

文献レビューの結果、アピアランスケアに関する 29 件の国内事例報告から、がん治療に伴う外見変化と生活との関連に関する記述を抽出し、「治療マネジメント」「整容スキル」「新しい生活様式への適応」の 3 つの構成概念を設定した。これらの概念に基づき、外見に関連する生活上の困難を問う 28 項目の初期質問項目を作成した。

NGT による妥当性評価と項目の修正

がん領域の支援経験を有する医療職 8 名に対して NGT を 3 段階で実施した。第 1 段階での評価をもとに専門家との意見交換を行い、項目の表現や包括性について討議・修正を加えた。第 3 段階では最終案を提示し、全員から承認を得た。これにより、3 構成概念に対応する 21 項目の評価表試作版が完成した。

(2) ルックスケア自己評価表の構成概念妥当性（構造的妥当性）の検討

調査対象の属性

全国のがん患者を対象とした Web 調査を実施し、500 名の有効回答を得た。年齢の中央値は 65 歳で、性別は男性 343 名、女性 157 名であった。がんの罹患や治療による外見の影響を感じていると回答した者は 201 名であった。

確認的因子分析の結果

21 項目の回答データを用いてカテゴリカル確認的因子分析を実施した。その結果、3 因子構造モデルにおいて、CFI = 0.995、TLI = 0.995、RMSEA = 0.073 といった良好な適合度指標が得られ、ルックスケア自己評価表が構造的妥当性を有することが確認された。

ルックスケア評価表試作版		
【説明】 がんになることやその治療には副作用があります。副作用の中には外見に変化をきたす場合も少なくありません。 "ルックスケア"はそんな外見の変化に対して適切に対処することを指します。外見の変化に困る、外見の変化にどう対応して良いかわからないということもあると思います。また、外見が変わることで今まで行っていた活動に支障をきたすこともあると思います。この評価表はそれらの困りごとを評価するものです。		
番号	質問項目	回答
1	外見の問題に対して専門家、医療職に相談する	できている・できていない・関係ない
2	外見に関連した治療施設へ通う	できている・できていない・関係ない
3	外見に関する副作用に対応する	できている・できていない・関係ない
4	外見に関する自身の治療方針について理解する	できている・できていない・関係ない
5	人に会うときに化粧や髪剃りなど身だしなみに気を付ける	できている・できていない・関係ない
6	時と場合に応じた身だしなみを整える	できている・できていない・関係ない
7	お出かけの際にヘアアレンジを行う	できている・できていない・関係ない
8	日常的にシャンプーやヘアケアを行う	できている・できていない・関係ない
9	全身のスキンケアを行う	できている・できていない・関係ない
10	肌をいい状態に保つ	できている・できていない・関係ない
11	体毛のケアを行う	できている・できていない・関係ない
12	体臭ケアを行う	できている・できていない・関係ない
13	日常的にネイルケアを行う	できている・できていない・関係ない
14	脱毛箇所を補う道具を揃える	できている・できていない・関係ない
15	ウィッグの手入れを行う	できている・できていない・関係ない
16	外見を気にせず友人や恋人と出かける	できている・できていない・関係ない
17	外見を気にせず学校や職場に通う	できている・できていない・関係ない
18	外見を気にせず生活に必要な外出を行う	できている・できていない・関係ない
19	外見を気にせず趣味を楽しむ	できている・できていない・関係ない
20	外見を気にせず病前にやっていた活動を行う	できている・できていない・関係ない
21	外見を気にせず他人と今まで通りの関係を継続する	できている・できていない・関係ない

(3) がん領域における作業療法士のルックスケア実践に関する全国調査

回答者の属性とルックスケアの実施状況

全国のがん診療連携拠点病院に勤務する作業療法士を対象に実施した Web アンケート調査では、有効回答数は 186 名であった。性別は男性 86 名、女性 100 名で、作業療法士としての平均経験年数は 14.9 年、がん領域での経験は平均 8.0 年であった。ルックスケアの実施経験があると回答した者は 37 名 (19.9%) にとどまり、未経験者は 149 名 (80.1%) であった。

作業療法におけるルックスケアの必要性

ルックスケアの必要性については、116名(62.4%)が「必要である」と回答し、「どちらともいえない」は67名(36.0%)、「必要ない」は3名(1.6%)であった。「必要である」と回答した経験者では「就労にも関わる」「見た目が変わることでの気持ちや生活に変化がある」など、患者の社会生活への影響を理由に挙げている。未経験者からは「QOL向上につながる」「整容動作の一環である」「身体・認知機能との関連がある」といった理由が示された。一方で「どちらともいえない」と回答した者は、「看護師が行うこと」「知識が不足している」「専門家に任せるべき」などの理由を挙げており、専門性の認識や役割分担の曖昧さが示唆された。

ルックスケアにおける作業療法士の専門性に関する記述内容の分析

自由記述のテキストマイニングによる分析から、作業療法士の専門性として、以下のような視点が抽出された。すなわち、「身体・精神・認知機能に基づく評価・介入」「自助具や装具の活用に関する知識と技術」「生活歴・作業歴に基づいた個別目標の設定」などである。また、他職種との連携において「包括的な情報交換を行える」といった記述も確認された。これらは、作業療法士がルックスケアにおいて独自の専門性を発揮できる可能性を示している。

(4) 今後の展望

本研究により、がん患者の外見に関する悩みを生活の質の観点から可視化する評価表の有効性が確認され、さらに作業療法士をはじめとする医療専門職のルックスケアに対する意識と専門性の一端が明らかとなった。今後は、試作されたルックスケア自己評価表を臨床現場に導入し、実際の支援場面での有用性や活用方法を検証する必要がある。また、外見変化に伴う心理的・社会的困難に対し、医療に関わる多職種が連携し、評価結果に基づいた個別性の高い支援を展開することが望まれる。

さらに、今回の全国調査から、ルックスケアの必要性を認識しながらも実践に至っていない作業療法士が多い現状が明らかとなった。今後は、外見支援に関する知識と技術を体系的に学ぶ教育プログラムや研修の充実が求められる。とくに、身体・認知・精神機能の評価、整容動作支援、自助具の活用など、作業療法の専門性を生かしたルックスケアの実践モデルを構築することで、がん患者の社会参加と生活の再構築に寄与できると考えられる。

<文献>

- 1) 国立がん研究センターがん情報サービスがん統計：
https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html (2020年12月25日アクセス)
- 2) 厚生労働省健康局：がん患者の治療と職業生活の両立等の支援の現状について．
<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10901000-Kenkoukyoku-Soumuka/0000037517.pdf>
(2022年11月22日アクセス)
- 3) 国立がん研究センター研究開発費「がん患者の外見支援に関するガイドライン構築に向けた研究班」：アピアランスケアの手引き 2016年版，金原出版，2016．pp.8-9
- 4) 国立がん研究センター中央病院アピアランス支援センター：
<https://www.ncc.go.jp/jp/ncch/division/appearance/> (2022年11月22日アクセス)
- 5) 日本作業療法士協会：作業療法白書 2015．<https://www.jaot.or.jp/files/page/wp-content/uploads/2010/08/0Twhitepepar2015.pdf>，p.38
- 6) 錦古里美和ほか：わが国におけるがんに対する作業療法アンケート調査報告．Journal of Rehabilitation and Health Science 9，pp.19-25，2011
- 7) 北山晴一：分類することの暴力について～ルッキズムを支えてきたもの～．日本顔学会誌 22(2)，pp.15-22，2022
- 8) 原島博：顔は誰のものなのだろうか．日本顔学会誌 22(2)，pp.1-3，2022
- 9) Ayto, John: Twentieth Century Words. Oxford University Press, 1999

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 石橋仁美	4. 巻 37
2. 論文標題 化粧品業界×作業療法 化粧品支援の開発と教育の充実	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大阪作業療法ジャーナル	6. 最初と最後の頁 16-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石橋仁美	4. 巻 22
2. 論文標題 作業療法におけるルックスケア	5. 発行年 2025年
3. 雑誌名 臨床作業療法NOVA「一歩先のがん患者の作業療法」	6. 最初と最後の頁 37-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川原宇央, 石橋仁美, 石橋裕, 池知良昭, 田尻寿子	4. 巻 未定
2. 論文標題 がん患者に対する生活と関連づけたルックスケア自己評価表の開発 Nominal Group Techniqueを用いた内容的妥当性の検討	5. 発行年 2025年
3. 雑誌名 作業療法	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 池知良昭, 石橋裕, 石橋仁美, 田尻寿子	
2. 発表標題 終末期がん患者の外見の変化に苦痛を感じた家族と共に行った作業療法	
3. 学会等名 第37回日本緩和医療学会学術大会 第29回日本サイコオンコロジー学会総会 合同学術大会	
4. 発表年 2024年	

1．発表者名 川原宇央、石橋裕、石橋仁美
2．発表標題 ルックスケア評価表の開発-質問項目の作成と内容的妥当性の検討-
3．学会等名 第3回国際化粧品療法医学会2022
4．発表年 2022年

1．発表者名 石橋仁美
2．発表標題 作業療法におけるルックスケア実践-化粧と社会参加-
3．学会等名 第22回東海北陸作業療法学会（招待講演）
4．発表年 2023年

1．発表者名 川原宇央、池知良昭、中村春基、石橋仁美、石橋裕
2．発表標題 がんサバイバーに対する作業療法とルックスケアの展望
3．学会等名 第60回日本癌治療学会学術集会
4．発表年 2022年

1．発表者名 石橋仁美
2．発表標題 リハビリテーションにおけるがんのルックスケアの現状と今後の展望
3．学会等名 第5回国際化粧品療法医学会2024（招待講演）
4．発表年 2025年

1．発表者名 川原宇央，石橋仁美，石橋裕，池知良昭
2．発表標題 がん患者に対するルックスケア評価表の開発 構成概念妥当性の検討
3．学会等名 第 34 回日本保健科学学会学術集会
4．発表年 2024年

1．発表者名 池知良昭，石橋裕，石橋仁美，田尻寿子，池山和幸
2．発表標題 がん患者のルックスケアにおける作業療法の現状に関する調査-第1報
3．学会等名 第13回日本がんリハビリテーション研究会
4．発表年 2025年

1．発表者名 石橋仁美，池知良昭，石橋裕，田尻寿子，池山和幸
2．発表標題 がん患者のルックスケアにおける作業療法の現状に関する調査 作業療法での必要性と専門性
3．学会等名 第59回日本作業療法学会
4．発表年 2025年

〔図書〕 計1件	
1．著者名 石橋仁美（池知良昭，田尻寿子，三木恵美：編）	4．発行年 2023年
2．出版社 協同医書出版社	5．総ページ数 2
3．書名 終末期がん患者に対する緩和的作業療法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	石橋 裕 (ISHIBASHI YU) (50458585)	東京都立大学・人間健康科学研究科・准教授 (22604)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	川原 宇央 (KAWAHARA TAKAO)		
研究 協力者	池知 良昭 (IKECHI YOSHIAKI)		

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------